

オンライン講義概要

#立ち止まって考える



科学哲学

文学研究科・准教授
伊勢田 哲治

科学哲学の観点からみたコロナをめぐる言説 [全2回]

- | | | | |
|-----|----------|-------------|--------------------------|
| 第1回 | 2/7 (日) | 11:00~12:00 | 科学哲学の観点からみたコロナをめぐる言説 (1) |
| 第2回 | 2/14 (日) | 11:00~12:00 | 科学哲学の観点からみたコロナをめぐる言説 (2) |

京都大学オンライン公開講義 「立ち止まって、考える。」 Season2

【講義内容】

この一年間、われわれは新型コロナウイルスについて、感染経路や治療法・対処法などいろいろなことを語り合ってきました。このウイルスについての科学的な情報の真偽やもっともらしさを見極めなくてはならないようなことがらも多かっただろうと思います。

わたしが専門とする科学哲学は、科学の実践とは少し距離をおきながら、科学の方法論などについて考える分野です。決して直接どの情報が信用できるかが科学哲学からわかるわけではありませんが、そうした情報との接し方、距離のとり方について、少し参考になるような話はできるのではないかと思います。

【講師プロフィール】

京都大学文学研究科・准教授 伊勢田 哲治

1968年福岡生まれ。1991年京都大学卒業、2001年米国メリーランド大学 Ph.D.(philosophy)。1999年より名古屋大学情報文化学部講師、その後同大学大学院情報科学研究科准教授などを経て2008年より現職。著書に『疑似科学と科学の哲学』(名古屋大学出版会、2003年)、『哲学思考トレーニング』(ちくま新書、2005年)、『科学技術をよく考える』(共編著、名古屋大学出版会、2013年)など。



西洋哲学史

文学研究科・教授
大河内 泰樹

パンデミックから考える権力と国家——フーコーからヘーゲルへ [全2回]

第1回 2/13 (土) 14:00~15:00 パンデミックから考える権力と国家——フーコーからヘーゲルへ (1)

第2回 2/20 (土) 14:00~15:00 パンデミックから考える権力と国家——フーコーからヘーゲルへ (2)

京都大学オンライン公開講義 「立ち止まって、考える。」 Season2

【講義内容】

新型コロナウイルスが引き起こしたパンデミックは国家権力のあり方が私たちの安全と生死をまさに左右するものであることをあらためて浮き彫りにしました。しかし伝染病をいかに防ぐのかという課題は実は18世紀においてすでに近代国家の課題でした。

19世紀ドイツの哲学者であるヘーゲルが『法哲学』（1820年）という著作で構想した国家論の背景には、そうした市民の生に配慮する権力観があります。本講義では、この伝染病を防ぐ国家という観点を糸口に、フーコーの権力論と関連づけながら、ヘーゲルが構想した国家がどのようなものであったのかを論じてみたいと思います。

【講師プロフィール】

京都大学文学研究科・教授 大河内泰樹

国立人文研究所代表。著書に、*Ontologie und Reflexionsbestimmungen. Zur Genealogie der Wesenslogik Hegels.* Königshausen & Neumann, 2008、『政治において正しいとはどういうことか』（共著、勁草書房、2019年）、訳書にミヒャエル・クヴァンテ『カール・マルクスの哲学』（共訳、リベルタス出版、2019年）、ジュディス・バトラー『欲望の主体 二〇世紀フランスにおけるポスト・ヘーゲル主義』（共訳、堀之内出版、2019年）など。



現代技術文化史

文学研究科・教授

喜多 千草

技術文化史から考えるポストコロナ社会 [全2回]

第1回 2/13 (土) 11:00~12:00 e-topia再考：情報社会論から考えるポストコロナの都市

第2回 2/20 (土) 11:00~12:00 コミュニケーション装置としてのコンピュータ

京都大学オンライン公開講義 「立ち止まって、考える。」 Season2

【講義内容】

コロナ禍で思いもしないほどまでに、一気に加速したように見えるオンラインコミュニケーション。しかしこうした未来のありようを描き、その意味を論じていた人々があった。第1回はマサチューセッツ工科大学の建築学教授ウィリアム・ミッチェルが1999年に発表した*e-topia*を取り上げ、「実際に会うことのコスト」を考える議論を紹介する。

第2回はインターネットの始祖にあたるコンピュータネットワークが生まれる頃に、政府のコンピューティング領域助成機関でネットワーク構築プロジェクトを推進したボブ・テイラーが、コンピュータがコミュニケーション装置として使えることを書いた1968年の論説「コミュニケーション装置としてのコンピュータ」を取り上げ、オンラインコミュニケーションの意味を考える。

【講師プロフィール】

京都大学文学研究科・教授 喜多千草

京都大学文学部美学美術史学科を卒業後、NHKでディレクターとして番組制作に携わる。京都大学文学研究科に二十世紀学専修ができたときに最初の大学院生として復学し、コンピューティングの歴史研究で同専修で最初の博士号取得者となる。主著は博士論文をもとにした『インターネットの思想史』青土社、2003年（平成15年度日経BP・BizTech図書賞）、『起源のインターネット』青土社、2005年。



社会学

文学研究科・准教授
安里和晃

コロナ禍における外国人住民と質的調査 [全2回]

第1回 2/7 (日) 14:00~15:00 コロナ禍における外国人住民と質的調査 (1)

第2回 2/14 (日) 14:00~15:00 コロナ禍における外国人住民と質的調査 (2)

京都大学オンライン公開講義 「立ち止まって、考える。」 Season2

【講義内容】

新型コロナウイルスによる経済的影響は国籍、雇用形態、在留資格、職種、年齢、ジェンダーによって大きく異なる。

もともと正規職員の割合が低い外国人住民にとっては、経済的な影響が強いが、特に女性はパートで生計を立てている割合が高いため、影響は甚大である。脆弱なる者はより脆弱になる傾向が明快である。

調査はNPO フードバンクと連携して互恵的な対面調査を実施した。その過程において行政手続き支援も行った。また、非正規滞在者（不法滞在者）に対する支援も実施した。後半はコロナ禍における互恵性にもとづく調査、擁護、政策提言といった質的調査のコミットメントについて論じる。

【講師プロフィール】

京都大学文学研究科・准教授 安里和晃

沖縄県生まれ。移民研究、高齢者ケア、アジア社会に関心を持つ。フィリピンの農村研究から転向し、香港、台湾、シンガポールの外国人家事労働者の研究に従事。その後、アメリカ、ドイツやスウェーデンの高齢者介護に関する調査に従事する。2011年から京都大学の学生とともに、移民の子に対する学習支援も実施している。2020年、コロナ禍で経済的な困難を抱える主に外国人住民に対し食料配布を実施。2014年、ベニグノ・アキノ3世よりフィリピン大統領賞受賞。



文化遺産学

文学研究科・教授
吉井 秀夫

文化遺産が語る人類と災禍 〔講師3名による連続授業：全6回〕

第1回 2/27 (土) 11:00~12:00 スペインかぜと濱田耕作・梅原末治の朝鮮古蹟調査 (1)

第2回 3/6 (土) 11:00~12:00 スペインかぜと濱田耕作・梅原末治の朝鮮古蹟調査 (2)

京都大学オンライン公開講義 「立ち止まって、考える。」 Season2

【講義内容】

世界的にスペインかぜが流行していた1918年10月、京都帝国大学考古学教室の濱田耕作と梅原末治は、はじめての朝鮮古蹟調査に出発した。調査は順調に進んでいたものの、濱田の感染により、調査は中断されることになる。

1回目の講義では、彼らがこの時期に調査を行うことになった背景について概説する。2回目の講義では、現在デジタル化を進めている当時の調査関係資料のいくつかを紹介し、その学史的意義について紹介する。

【講師プロフィール】

京都大学文学研究科・教授 吉井秀夫

1964年生。京都大学大学院文学研究科教授。専門分野：朝鮮考古学（特に朝鮮三国時代の墓制研究）。朝鮮考古学史（特に植民地時代における朝鮮古蹟調査事業に対する研究）。『古代朝鮮 墳墓にみる国家形成』（京都大学学術出版会、2010年）。『植民地と歴史学』（『岩波講座 日本歴史』第22巻（歴史学の現在）2016年）。『朝鮮古蹟調査事業と「日本」考古学』（『考古学研究』第60巻第3号、2013年）



文化遺産学

文学研究科・助教

内記理

文化遺産が語る人類と災禍 [講師3名による連続授業: 全6回]

第3回 3/13 (土) 11:00~12:00 日本の学術調査隊によるガンダーラ調査

第4回 3/14 (日) 11:00~12:00 ガンダーラで認められた災害の痕跡

京都大学オンライン公開講義「立ち止まって、考える。」 Season2

【講義内容】

パキスタンやアフガニスタンと聞いて、皆さんはどのようなイメージをお持ちになるだろうか。地図上でも日本からは遠く離れ、歴史や文化においても日本とは関係性の薄い地域、といった印象を多くの方が持たれるのではないだろうか。

しかし、日本の文化について考える場合、古代にガンダーラの名で知られたこの地域の文化は非常に重大な意義を持つ。なぜなら、同地で発展を遂げた仏教文化が、古代以来の日本の文化に多大な影響を与えてきたためである。

本講義では、日本の研究者達によっておこなわれたガンダーラ現地調査の一端と、調査によって判明した過去の災害についての話を紹介する。

【講師プロフィール】

京都大学文学研究科・助教 内記理

京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター助教。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。京都大学文化財総合研究センター助教を経て、2019年より現職。専門は考古学。主著は、『ガンダーラ彫刻と仏教』（京都大学学術出版会、2016年）。2017年、三島海雲学術賞受賞。



文化遺産学

文学研究科・助教

富井 眞

文化遺産が語る人類と災禍 〔講師3名による連続授業：全6回〕

第5回 3/20 (土) 11:00~12:00 10³年スケールの災禍 —遺跡発掘調査ならでは—

第6回 3/21 (日) 11:00~12:00 先史時代の災禍とその前後のヒト —被災・復興は証明可能か—

京都大学オンライン公開講義 「立ち止まって、考える。」 Season2

【講義内容】

第5回：日本では、復興や防災に伴う工事においても、事前に遺跡（埋蔵文化財）の発掘調査が実施されるほどに文化遺産への意識が高い。また、実際に遺跡発掘で過去の災害痕跡に遭遇することは多く、発掘調査ならではのデータや知見も得られる。足もとの災禍を見てみよう。

第6回：考古学では、自然科学と人文学が両輪で進む。遺跡発掘で遠古の“災害”を自然現象として抽出し得た次には、その現象を取り巻く人間の営みを歴史として検討する。しかし、特に先史時代研究では、被災も復興も、実証するためには実は論理的課題が立ちはたかる。

【講師プロフィール】

京都大学文学研究科・助教 富井眞

縄文時代や欧州先史時代について研究してきた過程で、理論考古学的な取り組みに触れるうちに、過去の人間の行為・行動・文化・社会についての解明を目指す考古学および先史学の、方法と論理や研究史にも取り組む。また、京大構内遺跡の発掘調査を重ねる中で他分野交流も増え、環境変化や自然災害に関して、その考古学的情報を現代社会の防災・免災に活かす重要性を認識し、そうした情報の抽出にも努めている。



西洋美術史

文学研究科・教授

平川 佳世

人をつなぐものとしての美術－前近代の西洋美術に注目して [全2回]

第1回 2/27 (土) 14:00~15:00 人をつなぐものとしての美術－前近代の西洋美術に注目して (1)

第2回 2/28 (日) 14:00~15:00 人をつなぐものとしての美術－前近代の西洋美術に注目して (2)

京都大学オンライン公開講義 「立ち止まって、考える。」 Season2

【講義内容】

新型コロナ・ウィルスの流行は、私たち人類が心身ともに健康に生きていくために重要な「つながり」を分断しました。そして、他者との「つながり」を断ち切られた私たちは、「人とつながる」ことの意味を、日々、自問自答しています。

本講座では、私が専門とする中世末期からルネサンスにかけての西洋絵画を題材に、単に個々人の美的鑑賞の枠内にとどまらない、「人をつなぐもの」としての芸術作品の在り方について、考えます。そして、「言葉にできないもの」を他者に伝える手段としての芸術について認識を深め、ウィズ・コロナ時代の生き方を模索します。

【講師プロフィール】

京都大学文学研究科・教授 平川佳世

1968年、東京都生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。近畿大学准教授等を経て、2017年より現職。専門は北方ルネサンス美術および南北ヨーロッパ美術交流史。主著は *The Pictorialization of Dürer's Drawings in Northern Europe in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, Peter Lang, Bern, 2009。現在 16 世紀における特殊素材絵画の流行について、南北ヨーロッパ美術の交流の観点から研究しています。



美学

文学研究科・准教授

杉山 卓史

「ふれる」ことの美学 [全2回]

第1回 | 3/13 (土) 14:00~15:00 | 「ふれる」ことの美学 (前)

第2回 | 3/20 (土) 14:00~15:00 | 「ふれる」ことの美学 (後)

京都大学オンライン公開講義 「立ち止まって、考える。」 Season2

【講義内容】

コロナ禍で最も制限されたことの一つは「ふれる」ことであった。人間には五つの感覚——視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚——があるが、西洋哲学は伝統的に視覚と聴覚を高級感覚と見なして芸術を享受する特権的な地位を付与してきた。しかし他方で、触覚を最も根源的な感覚と見なす考えも、根強く存在する。本講義では、「ふれる」という行為がいかなるものであるのかを、他の感覚との関連に顧慮しつつ、西洋哲学における「感覚」についての理論——「美学」は語源的には「感覚の学」である——を参照しながら考えたい。人々が「ふれあう」ことのできる日々の再来を祈念しつつ。

【講師プロフィール】

京都大学文学研究科・准教授 杉山卓史

1978年愛知県生まれ。京都大学大学院文学研究博士後期課程修了。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員、筑波大学芸術系助教を経て、2016年より現職。専門は美学（感性論）・芸術学、特にカントとヘルダーを中心とする18世紀ドイツ語圏の美学思想。共著に *Computational Aesthetics* (Springer 2019)。主な論文に「「われ感ず、ゆえにわれ在り」のヘルダーにおける成立」『美学』第246号、2015年など。